

授業探訪

言語系科目・英語「英語ディベート」

全学共通英語必修科目 English Debate の歩み ～オンラインから対面へ

全学共通カリキュラム運営センター英語教育研究室室員／
外国語教育研究センター准教授 三島 雅一

はじめに

2018年、外国語教育研究センターの前身となる同センター準備室所属の英語教員を中心に、新たな英語カリキュラム開発の先駆けとして English Debate コースの開発がスタートした。同コースは、内容言語統合型学習 (CLIL) の導入として、批判的思考能力、協同能力、情報収集精査能力、論理的コミュニケーション能力等の21世紀型スキルを複合的に育成することを柱としたカリキュラムが特徴となっている。次世代の英語教育を志向しつつ、限られた時間の中で2020年度の開講を目指し、基礎カリキュラムの策定、教員用の授業リソースの開発やマニュアルの作成、種々のワークショップの実施、パイロット授業の実施と評価および研究、そして立教独自の教科書開発と、十全の準備を行い、2020年度秋学期の初開講を迎えた。しかしながら、同年春学期より実施されたコロナ感染拡大に伴う授業のオンライン化に伴い、本来対面の授業を想定した授業形式から当該コースにおいてもオンライン化を余儀なくされた。当初混乱が予想されたが、先に述べたように開講まで多くの準備を行ってきたことが幸いし、オンライン授業においても質の高い授業が提供できたと認識している。また本原稿執筆時の2021年度秋学期は、コロナ情勢の緩和を受け Debate コースはすべて対面で実施されている。本稿では私個人の授業体験を基に Debate コースにおけるオンラインそして対面式という二つの授業形態においてどのような長所あるいは短所が確認されたか、当該授業の性質を含め共有させていただきたい。また、ディベートの担当教員としてではなく、科目管理責任者の一員として2020年度の初開講から開講2年目の2021年度に向けて行ったコース改善のための施策に関して合わせて報告させていただく。

オンライン授業における English Debate

English Debate コースは英語でディベートを行うという目標を軸に、トピックの選択、ディベートの様式への理解、英語でディベート行うために必要な言語スキルの習得そしてディベート行うために必要な知識の醸成を行う情報収集と精査という一連の準備活動をグループ単位で常にコミュニケーションを行いながら進行するという特徴

がある。そのため、授業内外での学生間のインタラクションの場を提供することが必須となる。オンライン授業では Zoom のブレイクアウトを用いたグループインタラクションの環境が与えられるため、授業内活動における支障はほとんどなかったといえる。2020 年度秋学期終了後には担当教員に対するアンケートを実施し、多くの先生方からコースに関するさまざまなご意見をいただいた。アンケートの結果からも、グループでの活動に関してはオンラインでも全く問題がなかったことが多数報告され、私自身の授業体験と一致していた。半面、ディバートの評価を行う上ではオンライン授業における特殊性が障害となるケースにも直面した。まず一つはオンライン環境がすべての学生で一律ではないため、ディバート中に一部の学生の音声がよく聞き取れないケースや、途中でインターネットの接続を失ってしまうケース等があり、オンライン授業環境の根底的な差違が学習活動、学習評価に直接的な影響を及ぼす場合があることを改めて認識させられた。上記のアンケートにおいても同様の回答をされた先生方も多く見られた。

対面授業における English Debate

対面授業における授業運営は本来想定されていた授業形態であり、オンライン授業に起因する問題はその基本的な部分において発生しなかった。対面授業で特に長所として挙げられるのは学生の授業内におけるさまざまな活動を教員がリアルタイムでモニタリングし逐次必要なフィードバックや軌道修正を行えるという点にあると私は感じている。オンライン授業ではグループ単位で活動を行う場合、モニタリングをするためには、各グループのブレイクアウトルームへ移動することが必要であるし、全体をリアルタイムでモニタリングすることができない。そのため対面授業と比較した場合、Readily に学生に対してサポートを行うことが非常に困難である。現在も対面授業で授業を進行しているが、授業内で学生同士が話し合いを行っている際のスモールトーク等に耳を傾けていると、教員としては非常に多くの情報が得られる。例えば、話し合いのどこで躓いているのか、グループワークで行うべき内容についての理解が浅いあるいはできていない等、学生の動向から潜在的な問題を一早く察知し、対応することは対面授業でなければ実現できない。そういった意味では物理的な距離だけでなく学生のニーズに寄り添えるという点で対面式授業は学生との距離が近いと感じる。また学生からの直接の質問もオンライン授業と比べてはるかに増えた。総じて対面授業における学生間または学生教員間のインタラクションの質に限って言えばオンライン授業よりも優れた環境であると考えている。しかし対面授業においても必ずしも理想的と言えない側面が存在する。オンラインにおける「環境」が存在するように教室においても物理的な「環境」が授業に影響を与える場合もある。特に私が問題と感じている点としては、割り当てられた教室環境が必ずしも当該授業のようなアクティブラーニングを根幹としている授業形態にそぐわない場合もある。アクティブラーニングの導入等授業のアプローチにおける変革推進の流れを感じているが、本学の教室環境自体がその流れに追い付いていないと感じて

いる。講義形式の教室が多く存在しているし、椅子や机等の教室における移動が困難な教室も多数存在する。無論講義形式の教室で問題がない授業、あるいはそのような教室環境が望ましい場合があることを否定するものではない。あくまで当該授業のようにアクティブラーニングを行う授業では、教室環境の不備は授業運営だけでなく期待される教育効果においても理想的とは言い難い状況を生み出す可能性がある。この点に関しては学内において問題意識を共有し、カリキュラムという1次元の変革だけではなく教室設備を含めた物理的側面の変革もカップリングして考える必要がある点を強調しておきたい。

English Debate コース改善への施策

先に述べたように、English Debate は新規英語必修科目として数年の期間をかけて入念な準備を行い開講された。とりわけ、カリキュラム策定のみならず本コース独自の教科書開発を行ったことは特筆に値する。本学のように多様なレベルの学生が存在する高等教育機関において英語でしかもディベートを必修科目として行うというのは、国内では類を見ない。英語教育関係の教科書類を見ても英語を外国語として学ぶ学生に向けてディベートを指導するための教科書は国内外を見ても全くといって良いほど存在していない。そのような状況下での教科書開発は参考とできるものがない状態でのスタートであった。また非常に限られた時間での開発であった点も含めて、初版作成に携わった先生方に改めて感謝申し上げたい。私自身は初版の作成の途中から、そして第二版の作成に携わり、間近でその苦労をともにさせていただいた。初年度開講後教科書に関する大規模な教員アンケートを実施し、2021年2月にはその結果を精査した上で第二版への大幅な改訂を決定した。初版は多くの先生方からポジティブな意見を頂戴したが、同時に問題点も多く挙げられた。そのため、2021年度秋学期へ向けての改訂作業を開始したが、改訂の方向性と計画の立案、出版社との面談、また実際に作業を行っていただく先生方への業務の割り振りも含めて、実質的には2021年春学期の数か月という非常に限られた時間の中での改訂作業となった。多くの先生方また事務職員の方々の助けもあり、無事に第二版出版となり、英語教育研究室としても改定に伴う担当の先生方への説明会実施も含めて、まさに電光石火で科目改善への施策を実施した。説明会へ参加してくださった先生方からは非公式ではあるが、改訂版教科書に対して非常に多くのポジティブなご意見を頂戴し、感謝に堪えない。初版そして第二版の作成にあたり科目改善の要望、要請を真摯に受けとめ矢継ぎ早に実行に移すその実行力は、英語教育研究室に所属する先生方の英語教育に対する真摯な情熱と労力を厭わない姿勢にほかならず、これこそ新たな「英語の立教」を創出していく目に見えない原動力であると改めて確認させていただいた。

最後に

本稿では新規英語必修科目である English Debate のこの2年間の歩みをオンライン授業そして対面授業の観点から共有させていただいた。またカリキュラム作成の観点から、独自教科書の開発に関しても報告させていただいた。今後のコロナの情勢は依然として予断を許さない状況ではあるが、オンラインという授業の新しい形態を多方面で経験できたことは教育機関としての経験的アセットであると私は考えている。本稿で取り上げた1英語コースに限らず、ポストコロナにおいても継続してオンライン授業そして対面授業のメリット・デメリットを全学で共有しつつ、多様な形態の学習環境を整えることは大学のさらなる発展にとって非常に有益であると考え。対面＝常時あるいはオンライン＝非常時というバイナリーな考えから脱却し、学びの形態の多様化を広く受容していく土壌が形成されることを強く期待している。

みしま まさかず